

スライド教材

被爆前の長崎の日常

長崎中心部エリアの暮らし

ポイント

- ・ 被爆前の長崎の暮らしを知る
- ・ 長崎中心部の暮らしを知る
- ・ 戦争の進行と日常の変化を知る
- ・ 今と当時の暮らしの共通点を探す

使用にあたって

- ・ 教育目的であれば誰でも自由にご利用いただけます
- ・ 教育目的の使用に限り、改変加工を許可します
- ・ 使用の際にはクレジットを記入してください
- ・ 営利目的の使用はお控えください

みせ せい いろ

三瀬清一郎さん



1935年生まれ。10歳のとき、爆心地から3.6キロの矢の平町で被爆した。当時は伊良林国民学校の五年生。祖母や母、姉、妹、弟たちと八人暮らしで父は出征中だった。建物強制疎開先の長崎市矢の平町の自宅で被爆した。

「三瀬商店」があったのは、このあたりです。
タオルやハンカチ、衣料品などの卸店で、
自宅を兼ねた店舗は木造3階建てでした。

一帯は現在も長崎市の中心繁華街だが、
当時も県庁や警察、裁判所、学校、銀行、
公設市場や商店が並び、にぎわっていた。



2022年6月撮影

少年時代を過ごした長崎市旧築町1番地（現在の万橋周辺）に立つ三瀬清一郎さん



1933（昭和8）年頃撮影（三瀬商店前）
赤ん坊は、前年（1932年）に生まれた三瀬さんの姉

カメラを持っているのが貴重な時代ですが、
父はドイツ製のカメラを持っていました。
うちのあたりはかなり賑やかでしたよ。

姉が乗っているのはスケートと呼んでました。
今で言うキックボードですね。
当時としてはかなり洒落たおもちゃでした。

2

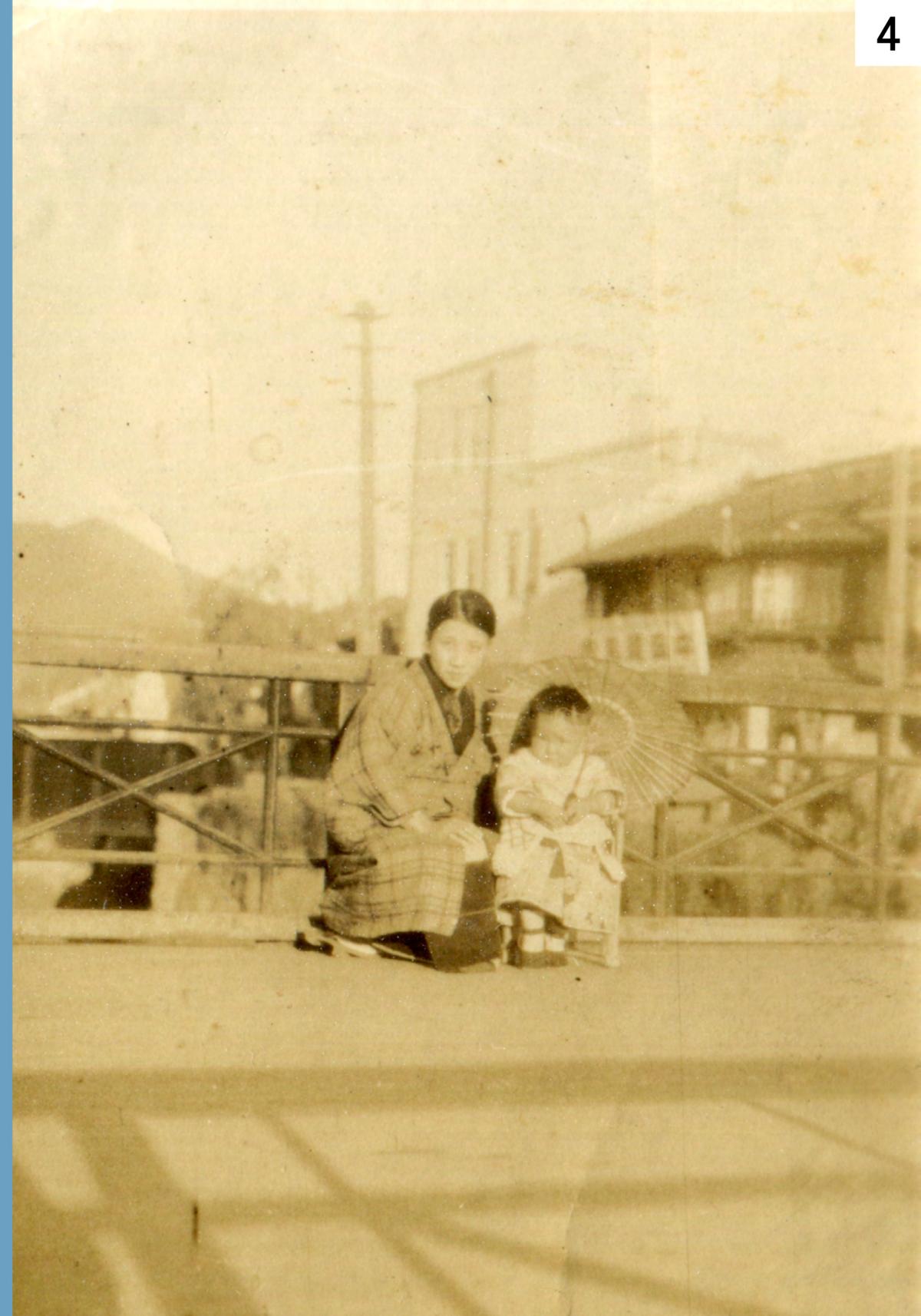
看板や幟、通りを行きかう人から商店街のにぎわいがうかがえる。三瀬さんが生まれた1935（昭和10）年、長崎市は人口約21万人。全国で10位の都市だった。

3

三瀬さんは7人きょうだいの2番目。昭和時代の前半、労働力や兵力を支える人口を増やそうと、国を挙げて出産が奨励された。「産めよ、殖やせよ」といったスローガンまで登場。7人きょうだいは珍しい人数ではなかった。



1930年代後半（昭和10年代前半）頃撮影（三瀬商店前）
左から姉、三瀬さん、祖母、母



1938（昭和13）年前後に撮影（よろずばし万橋）
左奥に見える黒い橋は、路面電車の鉄橋

店の横の万橋で撮った母と妹の写真です。
絵日傘をさして、ちょっとしゅれとりますね。

今は段ボールですが、当時はこんな木箱で
ものを運んでおったんです。

箱の中にはタオルやハンカチが入ってます。

原爆被害や再開発で当時の建物は大半が建て替えられ、街並みは大きく変化した。

長崎の場合、「写真4」のうしろにも見えるように、街を囲む山の稜線はほとんど姿を変えていないため、撮影場所を推定する手がかりになる。

1938（昭和13）年前後に撮影（三瀬商店前）
左が母、正面が妹



父や近所の商店の人たちです。
そろいの制服や旗まで作ってたんですね。

地域住民による防空団体とみられる。空襲による火災に備え、軍の指導のもとで警備や警報、避難所の管理などを任務とした。三瀬さんの父(前列右から5番目)は陸軍の在郷軍人(現役を離れた軍人)で、この団体のリーダー的な存在だった。

1930年代(昭和5~15年)長崎市の諏訪神社





1939（昭和14）年頃撮影（佐賀県鹿島市にある祐徳稲荷神社）
最前列右から3番目に写るのが三瀬さん

正月は家族や従業員と初詣に行きました。
子どもたちはハイカラな格好をしていますね。

店の従業員たちです。

あの人からはよく怒られたとか、
今でもみんなの名前をよく憶えています。

7

このころはおしゃれな子ども服が手に入った。
しかし、戦争の影響で次第に物資が不足し、
翌年1940（昭和15）年には「ぜいたくは
敵だ」という標語が登場した。

8

戦争に伴う物資不足から、1940年に生活
必需品の配給制度が始まり、次第に三瀬商店
は商売を続けるのが難しくなった。戦況が厳
しくなると従業員たちにも赤紙（軍隊の召集令
状）が届き、出征していった。



1933～34（昭和8～9）年頃撮影（三瀬商店）

私の小学校入学写真です。
1クラスは60人も児童がいたんですよ。
今の2クラス分の人数ですね。

三瀬さんが入学した新興善小学校しんこうぜん（国民学校）には全校生徒が約1700人もいた。しかし戦後、児童数が減少し、1997（平成9）年に閉校となった。校舎は原爆投下直後、救護所として使用されたことから、跡地に建設された長崎市立図書館には、救護所の様子を再現した「新興善メモリアル」が設けられている。



1941年撮影（新興善国民学校）
三瀬さんは最前列、女性の教員の左側

戦争末期になると、国策として『建物強制疎開』が行われました。わが町も対象になり、三瀬商店は昭和20（1945）年6月に取り壊されました。

当時の建物は木造が多かった。空襲による火災の拡大を防ぐための空き地（防火帯）を設ける目的で、重要施設周辺や住宅密集地で建物を撤去する「建物強制疎開」が行われた。長崎市では約61万平方メートルが対象となった。



被爆前 建物疎開（三瀬商店周辺の防火帯）を撮った米軍の航空写真

提供：（公財）長崎平和推進協会写真資料調査部会

原爆投下後の三瀬商店周辺です。
私は建物疎開後に引っ越していた矢の平
(爆心地から約3・6キロ)で被爆しました。

真ん中の大きな建物は当時、公設市場で働く人が多く暮らしていた集合住宅。右側は中島川。1945年8月9日に原爆が炸裂したとき、この一帯は爆心との間にある山が熱線をさえぎり、すぐには火災が起きなかった。だが、9日昼過ぎから夜中にかけて、県庁本庁舎付近から出た火が広がった。



被爆後 三瀬さんの住んでいた旧築町周辺

提供：長崎原爆資料館